

都市機能構造に関する研究

— 都市建物の景観と色彩 —

今井 健治* 川崎三十四* 吉国 真生*

Research concerning function structure of city. Spectacle in city building and color.

Kenji IMAI. Satoshi KAWASAKI. Mao YOSHIKUNI

The spectacle and the color in the city building of the Kanazawa city were investigated. The basic of the color of traditional enviromental preservation district was a brown system. In the color of the modern city spectacle creation district, the gray system and the brown system were majority. The color of the furniture of street was a gray system and a brown system.

1. 目 的

近年、都市の魅力を上向きさせようとする活動が活発となり、それが都市の景観形成に集約され、地域の個性、魅力づくりの施策や、社会的関心の高まりとなっている。

金沢の街は、戦災にあわなかった古都というイメージが強いが、歴史や伝統に安住することなく、常に新しい都市の魅力を導入してきた都市である。

1995年に策定された「金沢世界都市構想」は、金沢らしさを基本に、「伝統環境保全区域」と「近代的都市景観創出区域」を設定し、外観建築意匠を基調として地域の特性にふさわしい景観基準に基づき、保全と開発の調和のとれた景観形成に取り組むものとするような意を述べている。

本編は、金沢において、建物の色彩が景観をどう表現しているのか、また、調和しているのかといった、伝統的、近代的色彩バランスを考察し、金沢のイメージカラーはどのようなものを外観建築意匠的に分析することを目的とし、1997年の夏季に調査を行った結果を整理したものである。

2. 調査研究の方法

本研究の調査領域は、伝統的街並み、近代的街並み、公共施設、ストリート・ファニチュアに分けた。

図-1に示す、伝統的街並みでは、武家屋敷、東茶屋街界隈を、図-2に示す、近代的街並みでは、金沢駅周辺（西口と東口）と武蔵ヶ辻から片町の都心軸を対象とした。

調査方法は、伝統的街並み、公共施設、ストリート・ファニチュアに関しては、写真撮影をもとにその色彩と周辺との色彩調和を考察した。

近代的街並みの駅周辺は、金沢駅を中心に半径500メートルから600メートル以内で5階以上のホテル、オフィスビル、マンション等の建物、都心軸は、それに面したオフィスビル、デパート、ホテル等の建物の色彩をカラーチップをもってカラーマッピングを行い、全体的カラーイメージを分析した。更に、カラーマッピングを基に建築物の色彩を茶系、グレー系、クリーム系、ローズ系、オリーブ系、その他に分けて色彩分布を調べた。

表-1 色彩に関する景観形成基準

武家屋敷群区域	周辺の街並みとの調和を図る。
東山区域	区域の伝統的意匠に準じた色彩とする。
駅西区域	茶、グレーなどを基調とした落ち着いた色調とする。
金沢駅区域	茶、グレーなどを基調とした落ち着いた色調とする。
武蔵～香林坊	茶、グレーなどを基調とした落ち着いた色調とする。

(金沢市都市政策部まちなみ対策課、1992)

* 建築学科



図-1 調査地区 (伝統環境保全区域)



図-2 調査地区 (近代的都市景観創出区域)

3. 調査結果

色彩に関する景観形成基準を表-1に示し、下記に現地調査の結果を記す。

(1) 伝統環境保存区域の色彩

金沢の歴史的文化を象徴する伝統的景観が最も保存されている長町と東山界隈における「歴史的建築物、並びに周辺の建築物の色彩と調和について調べた。

旧藩時代、重臣の長子が代々住んでいた長町武家屋敷跡は、中、下級武士たちの住居群であった。武家屋敷の色彩景観は、焦げ茶色や茶色などの木造の家に、ベージュの土塀、老緑の木立と石垣を窺わずグレーの街路といった色彩でまとまっている。また、武家屋敷一角を流れる鞍月用水周辺には、武家屋敷と調和のとれたグレーの商店、マンションが多く見受けられ、街路はライトグレーで統一されている。武家屋敷一帯は茶系、グレーを基調とした落ち着いた景観を呈していた。

一方、東山は紅殻格子の古い家並みを残している。その中でも、東茶屋街では町屋が直接面して建ち並び、にぎやかな街並みを形成している。建物の色は赤茶色、

焦げ茶色などの茶系色が目立ち、壁は主として白が使われている。

東茶屋街周辺を流れる、浅野川沿のマンションは茶色、ベージュを基調としたものがほとんどであり、茶系色を基本とした東茶屋街との調和が窺われる。

(2) 近代的都市景観創出区域の色彩

1) 金沢駅周辺の色彩イメージ、色彩分布

駅西において、基調色はグレー系、ブルー系が多く、その他、白、茶系、クリーム系などであり、ブルーグリーン系、パープル系の色はほとんど使われていない。色にはそれぞれのイメージがあるが、グレー系は都会的、シックなイメージを持ち、また、ブルー系は都会的、モダンなイメージを持つ色とされていることから、全体イメージとしては都会的な景観が形成されている。駅西の50メートル道路の整備によって、ここ数年内に建設された建物がほとんどである。とくに、ランドマーク的存在であるガラス張りのパークビルを中心とし、ハーフミラーやパールタイルなど新しい建材、材料を使った建物が多数。ガラス、ハーフミラー系統の色は都会的、近代的というイメージが喚起されやすく、パークビルの背と、周りのグレー、パールミストの配色はビジネスライフで洗練された都会的なイメージを強調

都市機能構造に関する研究

している。

一方、駅東は往来より金沢の表玄関として位置づけられており、近年、整備事業が進められているが、駅西とはまた違った近代的な所である。

基調色はクリーム系、茶系が多く、その他、グレー系、ローズ系、ブルー系、グリーン系があり、駅西と同じくパープル系の色はほとんど使われていない。全体イメージとしては、金沢の表玄関である柔らかさと、伝統的なイメージに、洗練された都会的なイメージが加味された景観を形成している。

駅周辺の再開発が進む中、こうした色彩施設がどの程度、反映しているのか、金沢駅を中心に茶系、グレー系、クリーム系、ローズ系、オリーブ系、その他に分けて、具体的に色彩分布の調査を行った結果を図-3に示す。

茶系、グレー系の色相を合わせると約70%を占めており、色彩規範が反映されていることが窺える。

2) 都心軸（武蔵ヶ辻から片町）の色彩イメージ、色彩分布

まだ古い商業ビルが残る武蔵ヶ辻と南町の基調色はややダークなグレー系が多く、その他にクリーム系、オリーブ系、茶系などがあり、地味なイメージを受ける。

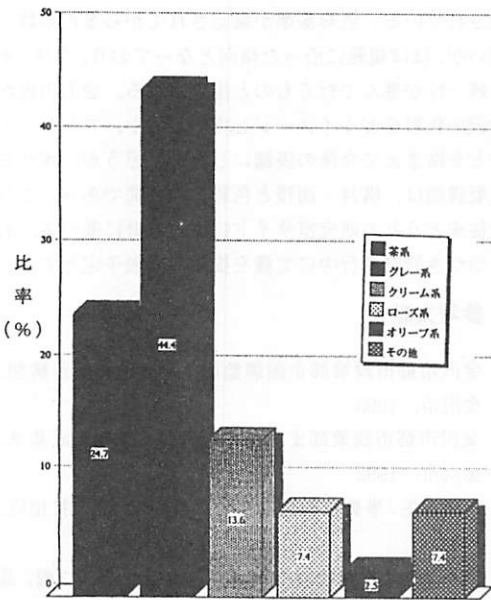


図-3 色彩分布 金沢駅周辺

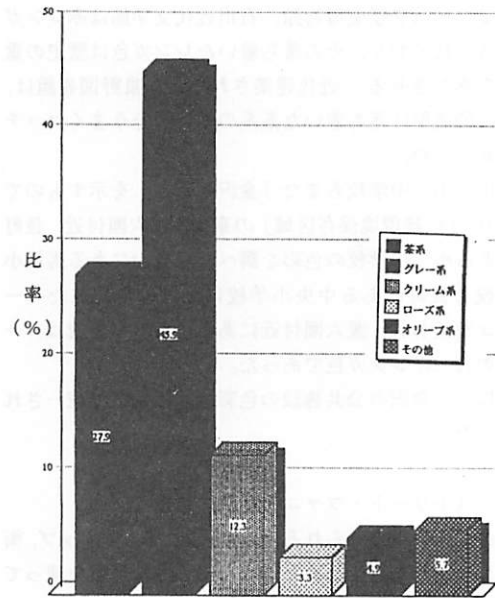


図-4 色彩分布 都心軸（武蔵ヶ辻～片町）

古いオフィスビルや再開発されたオフィスビルが混在しているためか、統一されたイメージを持っていない。

金沢の中心部、香林坊は新しいショッピングゾーンとして再開発が最も進んでおり、基調色は、白、グレー系、クリーム系、茶系が使われ、しゃれたイメージが感じられる。

片町は比較的古い建物が多く、基調色はグレー系、茶系がほとんどであり、地味なイメージであった。以上の都心軸に面した建物の色彩分布は、図-2のようになり、グレー系、茶系を合わせると70%以上を占めた。

3) 公共施設の色彩

公共建築物は古い時代のものや、近年再建されたもの様々である。そこで、金沢市の「顔」としての石川県庁、金沢市役所、博物館、市立図書館、学校といった金沢の公共施設の色彩の調査を行った。

石川県庁は大正11年に着工、同13年に完成。金沢では初めての本格的近代建築であった。色相は金茶色を示し、落ち着いた感じを窺わせる。

平成元年、新しく建て替えられた金沢市役所はレンガ造り調に建てられている。色相もそれにならぬレンガ色が使われ、石川県庁と共に金沢の伝統的な色を基調とするものとなっている。

また、県立歴史博物館、石川近代文学館は赤レンガで造られており、その落ち着いたレンガ色は歴史の重みを感じさせる。近代建築された市立泉野図書館は、近代的造形に落ち着いた茶系のベースをうまくマッチさせていた。

市立小、中学校もまた「金沢らしさ」を示すものであり、「伝統環境保存区域」の東山、兼六園付近、長町にある小、中学校の色彩を調べた。東山にある馬場小学校と長町にある中央小学校は土塀の色に似たベージュが使われ、兼六園付近にある小將町中学校はローズの入ったレンガ色であった。

以上、金沢の公共施設の色彩は、茶系色で統一されていた。

4) ストリート・ファニチュアの色彩

金沢の街中でみられる、公衆電話、バスストップ、街灯、ベンチなどを対象とし、どのような色彩を使って景観形成を統一しているかを調べた。

公衆電話にはボックス型とスタンド型があるが、本調査ではボックス型を対象とした。

金沢市内では6種類のボックスがみられ、使われている色系は茶系とグレー系であった。茶系は焦げ茶色、金茶色、茶ねずみ色が使われており、この中では、焦げ茶色や茶ねずみ色のボックスは、周囲の木立の連想感を与え、クラシックなイメージが強く、街路のライトグレーや木立の老緑色などの配色で、落ち着いた景観を感じさせる。

金茶色のボックスは、歴史的な雰囲気を持ったボックスに使われており、長町や緑の多い場所にみられ、木立の葉の色とうまく調和している。

この他、グレーのボックスは、金沢全域に設置されており、金沢の一般的ボックスであるグレーで統一されたボックスはモダンなイメージを感じさせ「近代的都市景観創出区域」に多くみられ、建築物との統一を感じさせる。

バスストップでも茶系が基調となるものであった。中央公園前のバスストップは、茶ねずみ色が使われ、金茶色がアクセントカラーとして使われている。クラシックで落ち着いた景観を形成しており、木立との統一を感じさせる。

アトリオ裏のバスストップは、デザインはモダンであるが、焦げ茶色と周囲の配色で上品さが感じられる。市役所前のバスストップも焦げ茶色を使っており、茶系が頻繁に使われている。

通りの街灯は焦げ茶色、茶ねずみ色を使っており、また、鞍月用水や浅野川沿には、緑を使った街灯がみられた。

ベンチに関しては、主に街路の色で統一されており、ローズ系の街路にはその色が使われている。

この他、信号機、道路標識、時計など、ほとんど茶系が使われていて、金沢のストリート・ファニチュアはほぼ茶系で統一されていた。

4. まとめ

金沢の色彩について実態調査をし、以下の知見を得た。

- 1) 「伝統環境保存区域」の色彩は茶系色を基本としたものであった。
- 2) 「近代的都市景観創出区域」の色彩は、グレー系と茶系が大半を占めたが、駅西はモダンなグレーを基調としたものが多く、駅東は落ち着いた茶系を基調としていた。都心軸はグレー系と茶系が大半を占め、全体的には地味な所が多い。
- 3) 公共施設の色彩は、全体的に茶系で統一されていた。
- 4) ストリート・ファニチュアの色彩は、グレー系と茶系で統一されていた。

以上、金沢は景観形成基準のもとにまちづくりが推進されている。色彩基準が策定されてからまだ年数で短いが、ほぼ規範に沿った傾向となっており、今後、更に統一性が進んで行くものと推定される。金沢市民が金沢の色彩をどうイメージしているのか、アンケートなどを踏まえて今後の課題にしたいと思うが、残せる重要課題は、構材・面積と色彩との相関であり、これは従来どうりの研究室サイドによる方針に基づき、引きつづき研究続行中にて機を捉え発表予定とする。

参考文献

- 1) 金沢市都市政策部企画調整課：金沢世界都市構想、金沢市、1995
- 2) 金沢市都市政策部まちなみ対策課：景観形成基準、金沢市、1992
- 3) 末永蒼生：事典色彩自由自在 事典編、晶文社出版、1994
- 4) 末永蒼生：事典色彩自由自在 カラーチップ編、晶文社出版、1994